
東方スキマ合体！

猫田犬次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方スキマ合体！

【Nコード】

N7327M

【作者名】

猫田犬次郎

【あらすじ】

妖怪だけを襲った突然の『異変』！ ある妖怪は倒れ、ある妖怪は凶暴化した！ 解決できるのは残された人間たちだけ！ そして始まる人間組vs妖怪組！ 崩壊するスペルカードル！ 八雲紫の新技「スキマ合体」によって始まる肉弾戦！ 死にゆく萃香を救おうとする霊夢！ スキマ合体によってパワーアップした魔理沙・咲夜・妖夢の妖怪退治！ 上海と蓬萊の恋模様はいかに！？ やがて解禁される八雲紫の真の実力！ 果たして人間は生き残れるのか！？ 妖怪は救われるのか！？ 幻想郷は平和を取り戻せるのか！

？ コメディーです。4あたりからいい感じになり始め、6から本調子。たぶん。あと感想はユーザーじゃなくても書けます。小説修行のために書いているのでリクエストは大体反映させると思います。「エロシーンぶち込め！」と言われたら、たぶんぶち込んじゃいます。

1 異変

何かが開いた。

それは扉というにはあまりに大きく、門というにはあまりに歪いびつだった。

暗い暗いその奥からは、不穏なものが流れ込んでくる。

それに触れたある者は理性を失い、ある者は生命力を失った。

そしてある者は……

1 異変

「うっ、きのう萃香すいかと飲みすぎた……」

はぐれいれいむ 博麗霊夢の目覚めはあまり気持ちの良いものではなかった。二日酔いというほどではなかったが、気だるい朝だった。居間で布団もなしに雑魚寝してしまっただけもあるだろう。

昨晚酒を酌み交わした萃香もすぐ横で寝ていた。なぜか萃香はちゃんと布団にくるまっていた。

「ほら！ さっさと起きな」

霊夢が声をかけるが、ぴくりとも動かなかった。

「全く、暢気なものね。朝だよ、ほら」

霊夢は萃香を足で小突いた……つもりだったがその際にバランスを崩し、かなり強く蹴ってしまった。

「あ、やば」

それでも反応はなかった。

この鬼が二日酔い？ 珍しい。何か『異変』でも起こる予兆かしら。

霊夢は萃香を放っておいて身支度をし、ささっと博麗神社の掃除

を済ませた。

「私の霊力じゃ何も感知できないけど、何かがおかしい気がする。うん。そう囁くささくのよ、私のゴースト的な何かが……」

再び萃香のところへ行くと、案の定さっきのままだ。

「まったく、いい加減起きなさい！」

そう言って霊夢が布団をまくり上げると、そこには青白い顔の萃香がいた。

「萃香！ どうしたの萃香！」

体温は低く、脈拍は弱い。ひどく衰弱しているようだった。

これは単なる二日酔いじゃない。霊夢はやはり『異変』の匂いを嗅ぎ取った。

「霊夢！」

自らを呼ぶ声に振り返ると、空間にぱっくりと開いた隙間から八やぐ雲紫が顔を覗かせてた。
もゆかり

「早く萃香を連れてこっちへ来て！」

霊夢は言われるままに萃香を抱え、急いで隙間の中へ入り込んだ。すると即座に隙間が閉じ、つい先ほどまでいた畳の居間とは一変、そこには得体の知れないスキマ空間が広がっていた。

「ふう……これだけでも一苦労」

紫はひどく疲れた様子だった。

「ねえ一体どうなってるの？ 萃香は大丈夫なの？」

「ちよつと待って、いま診てみるから」

紫は寝かされた萃香の体を調べ始めた。

「他にも同じ人が……」

この広いスキマ空間に、萃香と同じように寝かされた者が何人もいることに霊夢は気が付いた。

「そう、これは『異変』よ」

これはちよつとやさつとの『異変』ではないかもしれない。霊夢は紫の目を見て思った。

「大抵はここへ来て安静にしていれば大丈夫だけど、まずいわね…

…」

「萃香も大丈夫なんですよ？」

「不運が重なったというか……元から体調が悪かったのかもしれないわ」

あれ、やっぱり二日酔い？ 霊夢は心の中でつぶやいた。

「それに、何者かの攻撃を受けてる。ほら、腹部にこんなあざが」
ギクリ。霊夢に罪悪感が芽生えた。

「ひ、ひどい奴もいるもんだなあ。だ、誰がこんなことを、はは、でもすぐ治るんでしょう？」

「いや……」

「え？」

紫の悲しそうな顔を見て、霊夢は初めて事態の深刻さがわかり始めた。しかし、わからないことが多すぎる。

「ねえ何なの？ 一体どうなってるのよ！」

「そうね、まず……いま幻想郷で起っていることを説明するわ」
紫は幻想郷に充滿しつつある『異変』について、霊夢に説明し始めた。

「何かきっかけかはわからないけど、幻想郷と異世界が繋がってしまったのよ。おそらく幻想郷のどこかに空間の穴を空けられたみたい」

幻想郷のことについてはかなり詳しいと自負する霊夢も、さすがにその情報は掴んでいなかった。

「でも幻想郷の結界は破られてないわね」

振り向いて大鳥居を確認しようとしたが、そこにあるのはスキマ空間だけだった。

「そう、内側から侵入されたのよ。穴を見つけ次第早急に塞ぐつもり」

それほどのことをなぜ自分は気づかなかったのか。霊夢は不思議に思った。

「で、その異世界っていうのは？」

「その穴から出てきて暴れてる魔物から判断すると、たぶん魔界に近いものだと思う。だけど、魔界よりもずっと次元が低い。理性も何もない世界だわ」

そいつはたちが悪いな。霊夢は苦い顔をしていた。

「その暴れてる魔物ってのが問題なわけね」

「いいえ違うわ。それは幻想郷の人間にかかればすぐに駆除できるわ」

「じゃあ何が」

霊夢の表情は疑念を表していたが、焦りからくる苛立ちが見え隠れしていた。

「そこから流れてくる妖気が幻想郷に充満していること、それが問題なのよ」

「妖気なんていつだって充満してるじゃない、幻想郷には」

「確かにそうだけど、それとは少し違う妖気。理性を失わせ、暴力を欲する妖気。とはいえもともと幻想郷に充満していた妖気と性質は同じ。だからあなたは普段との違いに気が付かなかった」

確かにそうだった。

霊夢は何かしらの違和感を抱いていた。だが自らの霊力を周囲に張り巡らせても異質なものは感知できなかったのだ。気づくべきだったのは同質なものの『異変』であった。

早い段階でもっと踏み込んだ調査をしていれば萃香がこうなることもなかったと思うと、齒痒かった。そして自らの力の至らなさを感じ、悔しかった。

「ごめんなさい……」

「いえ、しょうがないわ。それより問題は異世界の妖気と幻想郷の

妖気を、私たち妖怪もほとんど区別できないってことなのよ」

「それはどういうこと？」

紫は手を霊夢のほうへ向けた。

「たとえば人間ならまず肉体があり、それがエネルギーを生産して肉体を動かし、付加的な霊力でもって能力を使ってるの」

次にその手を紫自身に向けた。

「でも妖怪は違う。妖気によって肉体を動かし、妖気によって能力を使うの。全ての生命活動の根幹に妖気があるの」

妖怪の生命力が物理的な肉体に依存していないことは、度重なる戦いにより霊夢も実感を伴って理解していた。

「だから自分の纏う妖気を異世界の妖気に干渉されるとね、妖怪の存在自体に影響が出てしまうのよ」

「で、どうなるの？」

「もう幻想郷では異世界の妖気に干渉されてしまった妖怪が正気を失い、凶暴化し始めているわ。干渉を拒めるほどの妖怪も、自分の妖気の流れを止めているので生命力自体が希薄になり、瀕死の状态がほとんど」

「それで萃香も……」

「ええ。だから私もこの空間の外には出られないし他の場所じゃスキマを作ることすらできないの」

「他の場所？」

「そう、博麗神社以外の場所は駄目なの。博麗神社は結界の起点。つまり、霊力が常从这里から流れ出ているから、霊力や妖気だとか、そういった霊的なエネルギーの流れの上流にあたるのよ。そのせいで幻想郷ではここが一番異世界の妖気が薄い。とはいえ萃香が倒れるほどだから危険ではあるけどね」

霊夢は大体の状況を把握できたが、やはり萃香のことが気になった。

「萃香は大丈夫なんでしょうね？」

萃香の顔を見ると、さっきより弱っているような気がした。鬼ら

しい強い生命力は感じられず、そこにいるのは儚げな少女だった。
大丈夫だ、大丈夫なんだ。霊夢は心の中で何度もつぶやいていたが、自分の頬に流れるものを感じ、それは自分に言い聞かせる嘘に過ぎないと気づいた。

ただ萃香を見ているだけなのに、涙が止まらないのだ。霊夢の鋭い勘は残酷な答えしか出さなかった。

「普通は弱りすぎてなければここで安静している限り大丈夫だけど、萃香は衰弱がひどいわ。異世界の妖気による干渉がなくなっても自力で回復する保証はできない」

望んでもいない勘が霊夢の意思に反し働き続ける。

それを突き破るためにも、あえて言葉に出した。

「それって、死ぬかもしれないってことよね……」

「ええ正直に言えばそうよ。それも低くない確率で」

霊夢とは対照的に紫は冷静だった。それは霊夢の目には余裕として映った。紫の冷たい態度にすらすがり付こうと、恣意的にそう見ているのかもしれない。

「ちょっと待ちなさいよ……」

「一通りの手は尽くしたわ」

「何かないの？ あるんでしょ？ ほら！、何とか言ってよ、ねえ！」

「一か八かの危険な方法ならあるわ。あなたが手を貸してくれるならね」

「貸すよ！　いくらでも手を貸すつてば！」

「だけどそれだって助かる可能性から言えば、このまま萃香を寝かせておくのと大して違いはないわ」

「でもこのままじゃ……」

必ず死ぬ。霊夢が萃香に見た未来は口にできなかった。

紫は静かだが力のこもった声で言った。

「私たちは選ばなくちゃならない。生死を萃香自身に委ねるか、独善で殺してしまうリスクを負いつつも助けるか」

「萃香がこうなってるのは私の不注意でもあるのに、あとは本人に任せて死んだらそれは萃香の責任だって言うの？」

霊夢は歯を食いしばった。

「そんな選択肢選べない！」

そして覚悟を決めた。

「私は、いえ、私が！ 萃香を助けたい！」

涙に濡れていたが、その目は強く光る。

「……わかった。あなたがそこまで言うんだったら、やってもいいわ」

そこで初めて紫は笑顔を見せた。

しかし、その笑顔がさつきから泣きっぱなしの自分を落ち着かせるために作られたのが明らかなので、かえって霊夢は声を出して泣き始めてしまった。

「あなたのせいじゃない。背負いすぎちゃだめ」

紫は霊夢の肩をそつと抱いて優しく頭をなでた。

そうして紫は霊夢が落ち着くまで慰め続けていたが、一度も「大丈夫」とは言わなかった。

1 異変（後書き）

コメディーのつもりで書き始めたのに……

おかしいな、なんでこんなシリアスなんだ！

少し真面目なシーンを入れてみただけなのになあ。

次からはだいぶ軽くなる予定です。

次回「スキマ合体」、乞うご期待！

2 スキマ合体

「萃香と合体!？」

霊夢は驚いた。

「そうよ。あなたと萃香の境界を操り、一体化させるのよ」

「そんなことできるの？」

「たぶん」

「『たぶん』って……」

霊夢は呆れた顔で紫を見る。

「仕方ないじゃない。まだ研究中の技なんだから」

「研究中!？ 平然と言ってるけど相当危険じゃない!」

「まあ、人体実験に貢献すると思えばいいさ」

「『いいさ』って何がいいのさ!？」

霊夢はますます呆れた顔をした。

しかし紫はそれを無視して説明を続ける。

「でも、この力関係だと合体というより封印に近いわね。あなたの体の一部に弱った萃香を封印するの。それによって元気な巫女さんから生命力をいただけるわ。たぶん」

「また『たぶん』って……」

「鬼を封印するにはやっぱり左手がいいんじゃないかしら」

「どうして? 利き腕じゃないとか、心臓に近いとか？」

「ぬゝべゝで読ん……いや、文献で読んだことがあるの」

「へえ。そういうものかしら」

「とにかくまあ、封印自体はすぐに済むわ。でも問題はそれだけじゃない」

さっきまで飄々としていた紫も深刻な様子になっていた。

「スキマを操って封印した時に、弱った萃香が無事でいられるかどうかがまず第一の賭け。その後しばらくしてあなたが無事でいられ

るかが第二の賭け」

「私？」

「そう。弱った萃香が死なずにいれば、そのうち生命力を取り戻してくるはず。そうなると今度はあなたの生命力を奪いすぎてしまう可能性があるの。相手は鬼よ。回復して力関係が逆転すれば、あつという間にあなたの存在は消えてしまう。それが萃香に取り込まれただけならなんとかなるかもしれないけど、萃香が宿主であるあなたの生命力を吸い尽くして殺し、萃香ともども死んでしまう可能性も十分にあるわ」

「私自身が危険に晒されるのは覚悟してるけど……」

「そこであなたの力を使うの」

「私の？」

「ええ、あなたの強力な結界が必要なの」

「……なるほど！」

さすがは博麗の巫女。結界に関しては物分りがよかった。

「そう、結界を使って封印の範囲を左手に制限するの。難しいとは思うけど……できるかしら？」

「何言ってるの、私は博麗大結界を守る巫女よ！ 甘く見ないで！ それよりも早くやってちょうだい！」

「そうね、始めましょう」

霊夢の手の平に紫が触れると、そこにぱっくりとスキマが開いた。中をのぞいても何も無い。何だか気持ちの悪い光景だと霊夢は思った。

そして萃香に紫が触れると、その腹部に大きなスキマが開いた。何も知らない人が見たらまさに凄惨な光景でしかない。

「ここに手を」

紫の指し示す通りに、霊夢は左手のスキマを萃香のスキマにあてた。

紫は深呼吸をした。そして気合のこもった声が放たれた。

「スキマ合体！」

するとスキマがなくなつて霊夢の左手が萃香の腹部に吸い寄せられて一体化したかと思うと、今度は萃香が霊夢の左手に吸い込まれるようにして消えていった。

「おお……で、上手くいったの？」

霊夢の左手には特に変化はない。

「わからない。いま左手はどんな感じ？」

「うーん、冷たいというか、血の巡りが悪いというか……あつ、でもだんだんあつたかくなつてきてる！」

ドクン、ドクン、という感覚と共に、次第に左手は熱を持っていた。そして見た目も少しずつ変化しているようだった。

「私の手じゃなくなってる！」

霊夢の右手と比べると、左手は一回り小さく、子供っぽい。

「萃香の手ね。成功だね。あー疲れた」

そう言つて紫はその場で仰向けに寝転んだ。

「次は私の結界ね」

「ええ。まず手首から上を萃香に侵食されないようにする結界を張つてちょうだい。その次に肩までで食い止めるための結界」

紫は寝転んだまま指示を出した。

「肘にはやらなくていいの？」

「問題ないわ」

霊夢は何やらぶつぶつと唱え、無駄のない素早い動作で手首、そして肩にお札ふだを巻いた。

「結界はお手の物ね」

「まあね」

霊夢も一段落ついてほつと胸をなでおろした。

「萃香が回復したら切り離すから、それまで鬼に食われないように頑張ちなさい。萃香の力が強くなりすぎたら能力を使うのよ」

「能力？」

「そう、萃香の能力よ。ぐっと力を込めたりなんかすれば使えるんじゃない？」

「そんなあやふやな」

「きつと使えるわよ。能力を使えば妖気も減って侵食も弱まるはず。当然使い切ったら萃香は死んじゃうけど」

「わかったわ。なんとかしてみる」

霊夢は左手を優しくなでた。

「大丈夫。必ず助けるから、萃香」

2 スキマ合体（後書き）

なんだかまだコメディーっぽくないな。
ジャンル変えようかな。

3 集え

「さてと。これからあなたにやってもらいたいことがあるの」
そう言って紫はおもむろに起き上がった。

「『異変』ね」

霊夢はにやりと笑った。

「ふふ、血が騒ぐ？」

「ええ。妖怪退治は病みつきになるわ」

「でも残念ながら、これからやってもらいたいのは『退治』ではなく『救出』なの。萃香と同じように弱っている妖怪をここに運んできてほしいの」

「凶暴化した奴らは退治しなくていいのかしら」

「そいつらはものを考える力を失ってスペルカードのルールなんか通用しないから、今のあなたじゃ危険よ。それに、下手に刺激して戦闘が始まってしまうより、なるべく多くの妖怪を効率よく救出すべきだわ」

「確かに」

「それと、誰かサポートがほしいわね」

「あてはあるの？」

「もちろん。藍と橙らん ちえんに元気な人間は博霊神社に来るように呼びかけたピラを配らせてるから、そのうち誰か来るわ」

「藍と橙はサポートに出来ないの？」

「たぶん無理ね。式っていうのは私の妖気の入れ物だから、異世界の妖気の影響を受けやすいの。で、それを防ぐために乾電池で動かしてるけどそう長くは持たない。今頃電池切れで転がってるわ」

「式って乾電池使えるの!？」

「ええ、スキマ合体の技術よ」

「おそろべしスキマ合体……」

「むしろリスクが少ないぶん、物との合体こそ真骨頂なの。ま、それよりまたスキマ開いてみましょ」

紫が何も無い空間に手をかざすと、ぱっくりとスキマが開き、そこから博霊神社が見えた。

「じゃ、誰か来てないか探しに行つてちょうだい。三分後に同じ場所ですキマを開くわ」

霊夢はスキマ空間を出て、ビラを見た人間が来ていないか探し始めた。

するとすぐに見つかった。ぐったりしたアリスを支えながら、魔理沙が賽銭箱に座っていたのだ。

「来たんだぜ？」

アリスの陰から人形の上海シャンハイと蓬萊ホウライも飛び出してきた。

「ビラで呼んどいて待たせるとは」

魔理沙は怒った表情を見せたが、実際には安堵しているようだった。

アリスはぐったりしていて意識はないようだが、萃香の時と違って血色はよかった。

「一体幻想郷はどうなってるんだ？」

「話はあと。とにかく紫のスキマ空間にアリスを避難させるのが先よ。こっちに来て」

霊夢は魔理沙にアリスを背負わせ、先ほどスキマ空間から出てきた場所へ戻った。

「そろそろ開くから待つて」

数十秒ののち、空間に水平な割れ目ができ、そこからぱっくりとスキマ空間が開いた。

「おまたせー。ビンゴ！ やっぱり来てたわね」

紫はアリスを無事に収容すると、魔理沙に大まかな現状を説明し始めた。

アリス・マーガトロイド、救出。

4 二体の人形

「で、パスモはどうなったんだ？」

「パスモ？」

「あ、萃香だったぜ」

「萃香なら私の左手にいるわ」

霊夢の言葉を魔理沙は理解できないでいた。
紫はさらにスキマ合体についても説明した。

「……という訳なの」

「よくわかったぜ」

そう言ったがおそらく魔理沙はまだ理解できていない。

「それよりどうして上海と蓬莱は動けるの？」

「この二体だけ中身が機械って聞いたことあるぜ」

「ワタシターチ」

「デンチシーキ」

「喋れんのかよ！」

思わず三人ともども突っ込んだ。

「ぎこちない喋り方が気持ち悪いぜ」

「しかしまあアリスも研究熱心なこと」

「霊夢が怠惰なだけよ。時代はいま電池式だわ」

「私も電池式のキノコでもつくろっかな」

魔理沙の発言はスルーされ、話題はもっぱらアリスの機械人形だった。

「あなたたち、スキマ空間の外で魔法は使えるの？」

「ツカエナード」

「デモ、ウゴキマワツタリ、ツウシンシタリハデキマース。あと普通に喋れるよ」

「だったら最初から普通に喋りなさいよ！」

「いやあ、キャラ設定くずすとアリスの奴アホみたいに怒るんだよ

ね」

蓬萊は少し口が悪いようだった。

「まったくあんたたちは……」

流石の紫も呆れた様子だった。

「通信機能はどうなってるの？」

蓬萊が答えた。

「アリスの持つてる機械式万能魔理沙人形を使えばババアでも通信できるよ」

「えっ」

魔理沙は驚いた。

「ババア？ ひどい言われようね、霊夢」

「えっ」

霊夢もまさかの被弾に驚いた。

「それはどこにあるの」

紫が問いかけると上海がアリスを起こし始めた。

「アリスーオキテー。メカマリサダシテー」

アリスは目覚めないが、何かつぶやいている。

「……だめ……魔理沙は渡さない……」

少し、変な空気になった。

「勝手に取りやいんだよ」

「ソナナダメダヨー」

制止する上海を振り切り蓬萊は素早くアリスのスカートの中に潜り込み、何かを持ってきた。

それは手乗りサイズの、ものすごくメカっぽい魔理沙だった。

「なんか怖いぜ」

「これが機械式万能魔理沙人形、通称メカマリサ。自律人形じゃないけどこれでアリスじゃなくても俺たちと通信できるよ」

どこに入れていたんだろう、という疑問を押し殺し、紫はそれを受け取った。

「それじゃあ人形たちには霊夢のサポート役を頼むわ。その三人を

救出組とするから、今すぐに出発してちょうだい」

「おうよ」

「ワカリマシター」

蓬萊と上海は結構乗り気なようだった。

「魔理沙は？」

「他にやることがあるから残ってもらうわ」

「なんなのぜ？」

「秘密。それよりあなたたち、早く行きなさい」

霊夢たちは紫に促され、スキマ空間を出た。

5 救出組

スキマ空間を出ると、そこは博麗神社の大鳥居の下だった。

振り返れば空間に開いたスキマはもうない。紫も妖怪であるので能力を使うのは楽ではないのだろう。

霊夢は感覚を研ぎ澄ましてみても妖気の違いを感知できなかった。つまり『異変』を認識出来ないのだ。

妖怪ではないので霊力を使うのにも支障はなさそうだった。もしかしたら封印や結界などの大きな霊力を消費するような術には影響があるのかもしれないが、飛んだりするぶんには問題はない。

「蓬莱、動作確認お願い」

「もうチエック済み。問題ないよ。いつでもババアと通信できる」

「魔法は？」

「やっぱり使えないね。アリスが起きたら少しくらい使えるようになるかもしれないけど」

「そう。じゃあ蓬莱は周囲の警戒を」

「了解」

「上海は私の死角をカバーしつつ、蓬莱や紫から得た情報を私に」

「了解デース」

救出組が役割を決め、境内を抜けようとしたとき、上海が霊夢に伝えた。

「先行する蓬莱から連絡。何か近づいてる」

そりゃやっぱりあんたも普通に喋れるよね、と思いながらも霊夢は警戒を強めた。

「蓬莱から連絡。斬られそうになったみたい」

「敵か！」

目の前の茂みを何者かが進む音がもう聞こえ始めていた。

スキマ収容の拠点である博麗神社への敵襲ならかなりまずい。霊

夢は何としてもここで食い止める覚悟をした。

すると、「妖夢だったよー」と緊張感のない声で蓬萊が出てきた。一気に気が抜けた。

「幽々子様が！」

茂みから出てきた幽々子を背負う妖夢は、泣きそうな顔で霊夢に迫った。

「あーはいはい大丈夫。さっさと鳥居の下に行きな」

さっきは無駄に焦ってしまったので、霊夢は少し機嫌が悪い

「へ？」

非常事態だと思っていたのにぞんざいな扱いを受け、訳もわからず言われるがままに妖夢は歩いていった。その際に妖夢は何度も振り返り「これでいいんだよね？」という視線を送るが、面倒なので霊夢は無視していた。

「お前鬼だな」

「いいじゃない、どうせスキマ空間に行って寝てりや元気になるんだし。一応鳥居の下で十分ごとにスキマ開くことになってるけど…」

…上海、一分後にスキマ開けるよう連絡して」

「了解」

気を取り直し、救出組は境内裏の雑木林に入っていた。

西行寺幽々子、救出。

5 救出組（後書き）

毎日ちまちま更新です。

6 境内裏の雑木林

そう言えば妖夢は元気だったし一応人間ということでもいいのだろうか。いやもしかすると気が付かなかっただけで、半霊はものすごく具合が悪かったのかもしれない。

半霊だけ死んでしまったらどうなるのか。気になる。ものすごく気になる。今度こっそり半霊だけ殺してみようか。

霊夢はそんなことを考えていた。

「案外安全だねー」

雑木林を進みながら上海が言った。蓬萊と比べると真面目そうな上海も、もう完全にカタコトで喋るのをやめている。

「妖怪っていつても、うじゃうじゃいる訳じゃないからね。それにしても、どこへ向かったらいいかわからないわ」

霊夢たちは特に目的地を決めず、ただ道なりに歩いていった。

おそらく凶暴化せずに瀕死の妖怪は高レベルであるだろうから、周囲を歩き回ったら紅魔館か永遠亭あたりに行ってみようかと霊夢は考えていた。

飛んで行けばもっと早く探索できるだろうが、目立つのは危険なのであえて徒歩を選択している。あくまで救出組であり、極力戦闘を避けるべきだからだ。勝ち負けの問題ではなく、時間も体力も無駄にできないのだ。それに萃香のことも考えると戦闘はリスクが大きい。空中で派手な戦闘を始めてしまえば他の凶暴化した妖怪も集まってくる可能性も高く、リスクはどこまでも増大する。だから面倒でも歩かなければならない。

とはいえ、霊夢はそれほど悪い気分ではなかった。

普段は飛び越えてしまうので雑木林を歩くのは久しぶりだった。

樹木の湿り気を含む空気を吸えば緊張は和らぎ、風が葉を揺らす音は耳に心地よい。

こうやって歩くのも気持ちいいな。霊夢は思った。

「この道も場合によってはロマンチックね」

「霊夢のんきー」

そう言う上海にも緊張が感じられなかった。

それにしてもこの子かわいいわね。霊夢は上海を気に入っていた。同じの一体くらいアリスにもらえないかしら。素直だし家事や神社の掃除もやってくれそうだわ。

しかし口は悪いが優秀な蓬莱も捨てがたい、そう考えていると、その蓬莱から「前方上空に敵影確認」との連絡が入った。

霊夢はすばやく道から茂みへと入り、しゃがみこんだ。草や土のにおいがぐつと近くなった。

蓬莱によるとルーミアらしいが尋常な様子ではないとのこと。

やがて木々の隙間からルーミアらしき姿が確認できた。しかし顔つきは凶悪で、いつもの間の抜けたルーミアではない。

霊夢たちはこのままやり過ごそうと息を潜めた。今はそうするしかないのだ。

ルーミアはちょうど真上に迫っていた。

霊夢は自分の体からじつとりと汗が滲むのを感じた。鼓動が全身に響く。

「ピピピピッ！　ピピピピッ！　ピピピピッ！　オ昼デース。正午ニナリマシター」

突然上海が言い出した。霊夢は呆気にとられた表情で上海を見た。「違うんです！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」

泣き出しそうな声で謝り続けるがもう遅い。見上げればルーミアと目が合った。

「ぐうううう……」と獣のようにになり、上空から一直線に急降下してきた。

「逃げるわよ！」

霊夢は瞬時に四方の木の幹に御札おふだを投げ付け、上海を掴んだ。

ルーミアの拳が服を掠めるが、霊夢は上手く回避した。霊夢は避けた勢いのまま全力で飛翔し、距離をとった。

そのたつた一撃で、ルーミアの周囲では木々がなぎ倒され、土がえぐれていた。

ルーミアが霊夢を追おうとした瞬間、霊夢の喝が放たれた。

「結界呪縛！」

するとルーミアを中心とした光の輪が現れて急速に狭まり、ルーミアを捉えた。

「御札による簡易的な結界だからそう長くは持たないわ。今のうちに逃げましょ」

自由を奪われたルーミアは必死に暴れていた。かなりの興奮状態にあり、がむしゃらに闇を振り撒いていた。そのおかげでルーミアの周囲一体はすぐに闇に包まれた。

「敵の方から煙幕を張ってくれるなんて親切ね」

少し余裕ができたので、離れたところにいた蓬莱も合流した。

霊夢はとつさに逃げた方向から、紅魔館へ向かうことにした。そこから湖が小さく見えていた。

「さつきはごめんなさい！」

上海は泣いていた。

「一体なんだったのよ」

「私たちは自律人形っていつでもアリスの命令に基づいて動いてるんです。だからアリスが倒れて『日常生活を補佐せよ』という命令から更新されずにそのまま、自動的に時報を鳴らしてしまっただけです。ごめんなさい！ 蓬莱は時報なんかオフにしてただろうけど、私ドジだから……うつ……」

「まあ何とかなったんだから、気にすることないわ」

「そうそう。俺も鳴らしちゃったし気にすんな」

「あんたもかい！」

霊夢は蓬莱の頭を大袈裟にひっぱたたいた。

「とにかくこのまま空中にいるのは目立つから林へ戻るわよ。上海、先に行って妖怪がいなかチェックして」

「わ、わかりました！」

上海は今度こそ役に立とうと張り切り、急いで下へ降りていった。

「ふふ、あなた優しいのね」

「なんのことだか」

霊夢と蓬萊は何も言わずに笑い合った。

そして上海からの連絡を受け、二人も雑木林の中へ入っていった。

6 境内裏の雑木林（後書き）

ここら辺から書き慣れてきました。

7 湖畔の敵影

霊夢は萃香と合体した左手が、徐々にだが、力を強めていくのを感じていた。自分自身の手として動かせるのだが、その手が放つ熱や拍動は明らかに自分のものではなかった。

疲れない程度に急ぎ足で林を進み、湖の近くまで来た。

湖の上となると、かなり見通しがいい。それは即ち敵に見つかりやすいということだ。

ここは慎重に行こうと霊夢は思った。

まだ雑木林を抜けていないがその場に留まり、蓬萊を斥候に出して索敵にあたらせた。

蓬萊の情報によると、湖畔には十匹前後の妖精がいる。当然凶暴化している。集団で行動しているわけではなく、まばらに存在し、互いに争っている者もいるという。

それ以外の脅威は今のところ確認できない。

少し面倒だが、妖精だけなら何とかなるだろうと霊夢は踏んだ。あまり霊力を使うと萃香とのパワーバランスが崩れる恐れがあるが、妖精なら予め霊力を込めてある御札だけを使って対処できる。

霊夢は再び進み、湖畔まで来た。木々に身を隠し、妖精を確認した。

しばらくすると、一匹の妖精がふわふわと漂いながら近くへ飛んできた。霊夢は身を隠せる限界まで接近していた。

ゆっくりと呼吸を整え、狙いを定めた。

そして妖精が完全に背を向けた瞬間、すばやく御札を一枚投げ、結界で縛った。

身動きが取れなくなった妖精は湖に落ち、しばらく水中から気泡が浮上し続けた。水面の波紋が消える頃になっても妖精が浮かび上がってくることはなかった。

ルーミアに使ったのと同じ御札で、なおかつ一枚だけだが、妖精

程度なら半日くらいは動きを封じられる。当然妖精は溺れてしまいが、それくらいでは死なないので問題はない。

同じようにして一匹、また一匹と沈めていった。そうやって単独で行動する妖精は全て沈めた。

厄介なのは複数でかたまっている妖精だ。といってもただ乱戦しているだけなのだが、四匹もいる。戦鬪を避けるためにはタイミングを見計らい、連続で素早く、一気に終わらせなければならぬ。四枚同時に投げられればいいが、距離があるので片手に一枚ずつでないとは正確性が失われる。両手で同時に投げるとしても四枚だとツームーションを要する。楽じゃない。

霊夢は御札を準備すると、大きく深呼吸をした。集中が高まっていった。

両手に御札を構えて狙いを定めると、四匹の動きを計算しながら時期を待った。

今だ！ 霊夢は素早く四匹に向けて御札を放った。ほぼ同時に、四匹は水面に音を立てた。

「霊夢すごいねー」

上海が思わず感嘆の声を上げたが、霊夢はすぐにそれをさえぎった。

「静かに。まだだわ」

霊夢はわかっていて、自分が落としたのは二匹。あとの二匹は御札が届く前に落下を始めていた。だから四匹の着水がほぼ同時だったのだ。両手で投げていても着水音は最低二回に分かれるはずだ。

つまり、確実に他の誰かがここにいるッ！

しかも、さっきの様子だと攻撃速度は霊夢より速い。能力も未知だ。

新手の敵か！？ だったらまずい。尋常な強さじゃない。霊夢は焦り始めた。

その時、霊夢の鋭い感覚、いや、勘というべきものが、敵を捉えた。

果敢にもすかさず飛び出し、相手に先んじてその胸に御札を突きつけていた。たった一枚でも、直接触れた状態からなら心臓を縛って殺せる。

しかし、先手を打ったはずの霊夢の首筋にも冷たい感触があった。それは頸動脈を正確に捉えた銀のナイフだった。

「なんだ咲夜か」

「霊夢……」

互いに肩の力を抜き、突きつけたものを下げた。霊夢の緊張も一気に解かれた。

だが咲夜のほうは緊張を保ったままだった。

「お嬢様が！」

そう叫ぶ咲夜の背中にはレミリアがいた。

「あーはいはい、まず木陰に隠れよう」

対照的に霊夢は冷静だった。

木陰に身を隠し、蓬萊と上海に周囲の索敵をさせている間、咲夜に紅魔館の状態を聞いた。

レミリアとパチュリーが衰弱し、フランが凶暴化しているらしい。門番はわからない。咲夜はフランの攻撃を受けてかなり疲労しているが、なんとかレミリアだけでも背負い、紅魔館を脱出して来たのだという。

一方霊夢は幻想郷に起きている『異変』をざっと掻い摘んで説明した。

「という訳だから、あとは紫に聞いてちょうだい」

「お嬢様は助かるんでしょうね!？」

「だから余裕で助かるって言うてるじゃない。とにかく博麗神社の鳥居んどこ行きゃいいから。あんたの能力ならさっきみたいに先手打たれてからでも対処できるんだから大丈夫よ、うん、行ける行ける」

そう言って霊夢は追い返すようにして咲夜とレミリアを送った。明らかに霊夢の機嫌は悪かった。

「ちょっと扱いが雑だよー」

「うつさいわね、どうせ助かるからいいのよ!」

「ごめんなさい……」

「……あんたまだ時報のことで落ち込んでんの?」

上海はこくりとうなずいた。

「私は全然怒ってないよ」

「ほんとに?」

「嘘なんか付かないわ」

上海が笑顔になったのにつられ、霊夢の機嫌も良くなった。

「しっかし、さっきは確実に先手を打ったのになー。時を止めるなんて滅茶苦茶な能力だよ。まったく、死ぬかと思ったわ」

霊夢は先ほどナイフを突きつけられた首筋をさすっていた。

「うわ、ちょっと血い出てんじゃん……」

無論、霊夢の機嫌は再び悪くなった。

レミリア・スカーレット、救出。

7 湖畔の敵影（後書き）

何だかバトル要素が強くなりました。

8 湖上のアイツ（前書き）

御札の結界で呪縛する技に名前がないのもあれなので、
斬新で奇抜であると共に複雑きわまる思索の経緯を経て、
「結界呪縛」と名付けました。

8 湖上のアイツ

チルノがいた。

霧の出ていない時間に湖の上を飛ぶということは、相当発見されやすくなる。それはチルノとしても同じで、霊夢たちは索敵しながら進んでいたぶん、先に見つけることができた。

霊夢の頭の中には三つの選択肢が浮かんだ。

一つ目はチルノに見つからないようにして通過し、そのまま紅魔館へ行く。これが最小労力で最短ルートだ。しかし、チルノに見つかってしまうと厄介だ。

二つ目は迂回する。この場でのリスクは一番低いが、迂回先でどんな妖怪と遭遇するかわからない。それに時間もかかる。

三つ目はそのまま進み、チルノを先制攻撃で撃破。上手くいけば最速最短ルートになるが、把握できる範囲でのリスクは最も高い。しかし、未知のリスクというものはほとんどなく、作戦運用者の力量があれば戦況をこちらでコントロールできる。

戦闘の天才と言われる霊夢にとっては、三つ目の選択肢が一番楽に思えた。機嫌が悪くて好戦的になっているのもあるだろう。ほとんど悩まず三つ目に決めた。霊夢はすでにチルノ攻略の作戦を考え始めていた。

あまり霊力を使わず、御札だけで勝たなければならない。今までと同じ「結界呪縛」なら発動の瞬間に少し霊力を使うだけで済む。霊力は御札を書いたときに込められているのだ。これは微弱な火花とそれで爆発を起こす火薬の関係と同じである。

だがチルノは先ほどの妖精たちよりは強いはずであった。おそらく御札一枚では縛れず、遠くからだと避けられてしまう。

使う御札は？枚。霊夢は作戦を立て終え、その場所で御札を準備した。

上海と蓬萊にはその場に留まってもらい、霊夢はチルノに気づか

れないぎりぎりのところまで進んでから静止した。攻撃するにはまだ距離がありすぎる。

しかし、霊夢は手に持ったただ一枚きりの御札を構え、全身全霊を込め、最大限の速度で、最大限の精度をもって投げた。それは並々ならぬ殺気を纏っていた。

チルノに届くまでであと少しだった。

だが気付かれてしまった。チルノが避けようとしたので、霊夢は早めに結界を発動させた。そのため光の輪はチルノが前に出していた片手だけを縛る結果に終わった。しかもチルノが振りほどこうとするとすぐに結界は破れてしまった。

不発に終わった攻撃ではあったが、凶暴化したチルノが奮い立つのに十分な脅威だった。霊夢は殺そうという気を込めていたのだから当然だ。

チルノは全速力で霊夢へ迫った。それに対し霊夢は背を向けて逃げた。だがチルノとの距離はみるみるうちに縮まり、霊夢は先ほど作戦を考えていた地点まで押し戻されてしまった。

そしてそこからさらに後退し始めると、霊夢はくるりと反転して止まり、チルノと向き直った。怒り狂ったチルノの顔が目前に迫った。

「八倍呪縛！」

湖上を漂っていた八枚の御札が光の輪を作り、その中心にいたチルノを瞬時に縛った。自由を失ったチルノは湖に落下し、沈んでいった。

そうして戦闘は突然に終わった。いや、作戦を立てた場所に八枚の御札を設置した時点でもう勝負は付いていたのかもしれない。過剰に殺気を込めた挑発の一手が火花となり、後は火薬が爆発するのみだったのだ。

攻撃に失敗して逃げると見せかけ深追いさせ、迎撃する。人類の有史以来の定番であり、三国志にも度々登場する作戦だ。高い成功率を持っている。

しかしそんなことを霊夢は知らない。霊夢はいつも、ただその場で一番楽をしようと動いているだけだ。だがそれが合理的な戦術を生み、勝利をもたらす。理に適っていれば楽であり、楽ならば理に適っているのだ。

戦術面においてはそれ故、霊夢は天才と言われる。よく「怠惰は天才の常」と言うが、霊夢ほどその言葉がしつくりくる者はいない。「あのバカ、理性を失ってさらにバカになってるわね」

霊夢が湖底に沈むチルノを見て言った。縛られたチルノはさらに興奮し、むやみやたらに能力を行使していた。しかしそんなことをしても自分の周囲の水が凍るだけで、意味はない。むしろ、自分で自分を氷付けにしているのである。

そのうちにそこら一帯の湖が凍ってしまった。湖底のチルノ自身も凍って完全に静止しているが、結界呪縛や氷に抗おうとしてさらに能力を使ってしまう、ますます凍った部分が拡大していく。いずれ湖全体が凍ってしまいそうな勢いだ。

「自分から時間稼ぎを手伝ってくれるなんて、親切ね。いや……新雪ね……」

「えっ？」

上海が聞き返した。

「いやだから『新雪ね』って……」

「何が」

「……何でもないわ」

御札八枚分の拘束力といっても結界呪縛が解けるまではせいぜい数十分。そのあとチルノが冷気を振り撒くのではなく、自分の周りの氷を砕かなければ脱出できないと気付くまで、ある程度はかかるだろう。もしかしたら永久に砕氷を始めないかもしれない。そうなれば紅魔館から帰ってくる際には再び遭遇せずに済むので、霊夢たちにとっては非常に助かる。

とにかく今はもうチルノを警戒する必要もなく、その場を後にした。そこで霊夢が控えめにつぶやいた。

「……チルノったら砕氷ね」

「えっ？」

「『最強』と『砕氷』を掛けて……いや何でもない。私が悪かったわ……」

それから会話のきっかけも掴めないまま、霊夢たちは紅魔館へと急いだ。

8 湖上のアイツ（後書き）

サブタイトル「湖上のアイツ」

実は「アイツ」と「アイス」を……いや、何でもありません。

9 門番

こうして見ると、紅魔館は尋常じゃない不気味さを醸し出す建物であった。深い紅色を基調とした外観は否応なしに血を連想させ、周囲を取り巻く霧も建物の色を反射しているせいで赤味を帯び、^{ちな}血腥さが鼻を突くような錯覚さえ感じる。

そんな妖しい館の門前に降り立った霊夢たちは、一人の門番を見つけた。ただ、『異変』が起こるこの時においては、いつもの様子ではなかった。

「……と思つたらいつも通り寝てんじゃねーか！ 起きろオラ！」

霊夢は横たわる門番の脇腹を容赦なく蹴飛ばした。

「違うよ瀕死なんだよー」

「え？ ああそついえば……でもいいのよ、顔色もいいからどうせ死にやしないだろうし。それにいつも通りに寝てるって可能性もあるのよ。ほら、寝てるんなら起きなさい」

霊夢は門番の頭を足で揺さぶった。流石に上海も蓬莱も引いている。

「かわいいそつだよー」

「鬼巫女だ」

心なしか門番の顔は青ざめ、いかにも「瀕死」という様相を呈し始めた。

「仕方ないわね……あなたたちでこれ運べる？」

蓬莱は門番の肩口を抱えて持ち上げてみた。

「これ意外と重いな。長距離だと一人じゃ厳しいね。二人なら運べるけど、霊夢を一人残すことになるけど大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるじゃない。さ、あなた達は行きなさい。早くしないと門番が死んじゃうわよ」

死にそうにしたのは霊夢なんだけどな、という言葉を読み込み、蓬莱は上海と共に門番を持ち上げた。

「じゃ、霊夢も早く帰ってこいよ」

「がんばってねー」

「まかせなさいっ」

蓬莱と上海が去り、霊夢は紅魔館の門を入っていった。敷地内に足を踏み入れただけで、そこに禍々《まがまが》しい妖気が漂うのを感じた。それはこの『異変』によるものと言つより、普段は抑えられていた吸血鬼が本来持つ妖気、いや、狂気が開放されているからだと霊夢は悟った。

「ふふ。久しぶりに血が騒ぐ……」

きつといま第三者が見ていたら、吸血鬼とは霊夢のことを指すと思うだろう。そんな顔で霊夢は紅魔館の扉を蹴り破った。

一方その頃。

「なあ上海、こいつの名前なんだっけ？」

「……もん……ばん……さん？」

門番、救出。

9 門番（後書き）

文章の「解像度」のようなものをもっと上げたいと思っているんだけど、二次創作ではそれが意外とやりにくい。要するにスカスカになりやすいのだ。世界観が安定しているからそれでも読めてしまうものだけど、やはり質は高くしたい。

10 紅魔館突入

紅魔館の扉は重い。その大きく立派な玄関に相応しい、重厚な扉なのだ。

しかし、霊夢の蹴りはもつと重かった。

蝶番が砕け飛び、前方に投げ出された扉は壁に叩きつけられた。
「ホコリが舞い散らないのは咲夜の掃除のおかげかしら？」

ちょうど玄関付近にいたため扉と壁に挟まれた妖精メイドが何匹かいたようだった。隙間から血がしたたる。

「あら、汚しちゃったわね……」

巻き込まれなかった妖精メイドは呆気にとられていたためにしばらくは襲ってこなかった。

その隙に霊夢は数匹を蹴り殺し、そこで霊夢に脅威を感じて攻撃してきた残りの数匹もあつという間に処理された。

妖精メイド程度の強さなら御札を使うまでもなかった。霊夢なら打撃によって撃破できるのだ。妖精なら殺してもまたどこから湧いてくるだろうから、それで全く問題なかった。

それに、霊夢は御札の効力を発動させるわずかな霊力すら惜しんでいた。萃香の力が強くなっていたのだ。

左手の結界を内側から押されているような感覚が次第に強くなっていた。それに萃香の力によって、霊夢は魂の疲労とでも言うべき負担を感じていた。

そろそろ使ってみる頃合かしら。霊夢は左手をさすった。

10 紅魔館突入（後書き）

修行につき毎日更新を厳守しているため、文量が少ないが更新。
一日二回更新しちゃうよりストックすべきだった。

一週間毎日更新してここまでの文量は原稿用紙換算56枚。
このペースを守れば月200枚の生産量。

二ヶ月もあれば文庫本一冊を書き上げる計算。
でももっと生産能力を上げたい。
週100枚が目標。

「ログ・ホライズン」のままれさんすぎすぎ。

11 自律人形は夢を見るか？

「ふう。チルノのバカが本当にバカでずっとバカやってて助かったよ」

「チルノさんをそんなに『バカ』って言ったらかわいそうだよー」
門番を抱えて湖を渡った蓬菜と上海は、林の中に隠れながら進んだ。

「それにしても重いな、これ」

「きつと筋肉質なんだよー」

「いいや、俺の予想だと鍋の食いすぎだね」
「なにそれー」

二人は飛びながら、何か感じるものがあつたのか、顔を見合わせた。

「アリス、目が覚めたみたいだな」

「よかった……」

微量ながら、アリスの妖気が送られ始めたのだ。安堵しながら、二人は体に力が湧き始めるのを感じた。

アリスが十分に回復すれば、電池でまかなっていた動力にアリスの妖気が加わり、魔法も使えるようになる。そのうち他の全ての人形とも繋がり、口頭で会話する必要もなくなる。二人の行動も完全にアリスが把握できるようになる。

「これでやつとアリスやみんなと繋がるねー」

「……なあ、こんなときじゃないと話せない話をしてもいいか？」
「え？」

「いや、今ならまだアリスにも会話の内容は知られないし、誰かが聞いている訳でもない。まだ他の人形とも繋がってない。俺たちにとっては初めての『二人だけの時間』の時間だろ？」

「あつ」

この発見は上海にも十分な驚きをもたらしたようだった。上海は平衡感覚を失うかのような、とても不安定な感覚に襲われたが、同時に何かふわりとしたそよ風のようなものが自分の背をなでたような気がした。それが「自由」だと知ったのは随分あとになってからのことだが、その風は上海をもう既に、今までとは違う存在へと変えてしまった。

そして再び蓬萊の言葉を噛み締めるようにして考え、頬を染めた。
「上海はさ、なんでアリスのために働いてんの？」

外には出さなかったが、なぜが蓬萊の声を聞いて少し狼狽してしまった。

「なんでって……そりゃあ、アリスのため？」

上海には蓬萊の考えていることが全くわからなかった。

「でもさあ、俺たちは完全自律とはいかないけど電池のおかげでほぼ自律してるだろ？」

アリスの命令だつて細かい動作とかじゃなくて、『目的』を言われるだけだし。

いつもなんとなく従っていて試したことはないけど、たぶん俺たちは他の人形と違って『嫌だ！』って断ることもできる。現に今だつてやる前に不可能だと判断したらちゃんと『できない』って言える訳だけど、他の人形は少しでもやってからじゃないと言えない。

だったら『意味』つてのを考えてもいいと思うんだ」

上海はあえて問うた。

「どういうこと？」

「何のためにアリスに仕えるのか。何のために俺たちは存在、いや生きるのかってことさ」

それでもやはり答えは決まっている。

「そんなの……」

「わかってる。俺もわかってるよ。『そんなのない』ってことは。でもだからこそ、見つけ出して、自分で決めなきゃいけないと思うんだ。」

どうせ本来は無意味な存在だし、それは人間だって同じはずだ。『ただ存在している』

それが答えで、きつと摂理みたいなもんだ。でも俺はその自分より多きな存在に『嫌だ!』ってわがままを言って自由になりたいんだ。そのために、『意味』を決めるんだ」

「それってアリスから離れるってこと?」

「違う違う、そんなことは思っていないよ。こんな大それたことを言っても結局はいつもと変わらない日常が待ってる。でもこれからはそこに、『意味』があるんだ」

「じゃあ蓬萊の『意味』……聞かせて?」

「俺は完全自律人形のために、アリスへ仕える。それはアリスの夢でもあるし、俺もなりたい。上海にもなってほしい。だからそれを実現させるために、どんなことだっていいから、アリスの力になるつもりだ」

「いいね。私もそうする」

ずっと難しい話で深刻になっていたが、ここへきて上海は花が咲くように笑顔になった。

そうだ、ネガティブな話じゃないんだ。もっと楽しくなるための話なんだ。上海は上々な気分となった。

「そんで実現したらもうアリスの妖気に頼らずに済むから、自分の家を建てたい。もちろん、アリスは好きだし感謝してるからそのままアリスのために働いたら幸せだ。」

そんな日が来たら……その家で上海、一緒に暮らしてくれないか?

俺は、上海のために生きたいんだ」

上海は急激に体が火照るのを感じた。

言われたことはわかる。すごく嬉しいってこともわかる。でも、

何を言えばいいのかわからない。

上海が言葉を出せずにいても、蓬萊は何も言わずに待っていてくれる。蓬萊のほうを見ると、微笑みながら、あえて目が合わないようにしてくれていた。上海は体の火照りとは全く別の暖かいものが、体の奥の奥の、そのまた奥から浮かび上がってくるように感じた。

「じゃあ、私も」

言葉は自然に出た。

体の中の暖かいものは弾けるようにして全身に溶けて、上海を変えていく。気が付けばそれがもつともつと、体の外のもつと外、世界だって変えてゆく。

上海は木々の緑が本当に緑だと知った。青い空が本当に青いと知った。土のおいを知った。花の色を知った。鳥の声を知った。肌をなでる風は確かにそこにあり、太い幹は揺るがない輪郭を作る。

上海はこの世界の存在を初めて感じたのだ。

「なつ、『意味』は必要だろ？」

朗らかな蓬萊の声は、耳に染み入るようで心地よかった。上海はそれをいつまでも聴いていたと思った。

11 自律人形は夢を見るか？（後書き）

コメディーなのに最近殺伐としてたんでプロポーズぶち込んでみた。

本当はラブコメを書いてみたかったけど、この小説にはそんな要素初めからなかった。何か重いぜ。

ラブコメ書けたらもう少し人気出るのかなあ。

12 二人の帰還

博麗神社に到着した上海と蓬萊は、門番を鳥居の下に寝かせた。そこは硬い石畳だったが、土の上よりはましなので仕方がなかった。およそ十分ごとに鳥居の下でスキマを開くことになっているが、メカマリサを使って紫に通信すれば、今すぐにスキマを開いてくれるだろう。『異変』によってスキマを開くのが紫にとって非常に重労働であるとはいえ、十分ごとにやっていることを少し早めるくらいのは紫だつて厭わないはずだ。

だが上海は通信せずにいた。アリスは一旦目を覚ましてが無理をせず再び眠り始めたので上海たちとの繋がりもまだ微弱であり、こちらから通信しない限り紫のほうには何も伝わらない。示し合わせた訳ではないが、同じように蓬萊も通信せずにいた。

意図は同じなのだろうか、そうならばいいと、上海は思った。

スキマは少なくとも十分以内には開いてしまう。あと数分あるかもしれないし、数秒しか時間は残されていないのかもしれない。

だからといって、二人の間に会話がある訳でもない。二人はただ言葉もなく寄り添っているだけだ。風にざわめく木々に耳を傾けたり、雛の待つ巢へ帰る親鳥を目で追ったり、神社のひんやりとした石畳を肌で感じたり、季節のにおいに胸をふくらませる。ただそれが、愛しい。そんな時間だった。

数分が経つと、不意に目の前の空間にすつつと割れ目ができ、スキマ空間が開いた。

「あら、わざわざ待つてたの？ 連絡してくれればすぐに開いたのに」

「紫も疲れてるんじゃないかと思ってさ」

蓬萊はしれつと言つてのけた。

「ふふ、いい子ね。さ、早く入りなさい」

本当に疲れていたのかはわからないが、紫は労をねぎらう言葉に

気を良くしていた。

中に入ると案外和やかな雰囲気だった。もう元気になってしまった妖怪はすることがないので、がやがやと騒いでいたのだ。妖怪たちは外に出る訳にもいかないし、異変解決まで大人しく神妙にしているなんてことができる性質^{たち}ではないのでしょうか。

「こんな事態なのにー」

上海はふくれてみせたものの、自分も人のこと言えないな、と思った。蓬萊のほうを見ると目が合い、こっそりと互いに笑い合った。

「あれ、魔理沙はー？」

魔理沙だけでなく、妖夢、咲夜もいなかった。

「特訓よ特訓」

「特訓？」

「そうよ。別のスキマ空間で修行に励んでいるのよ。完成した私の新技、スキマ合体のね！」

とある広大なスキマ空間に、見慣れぬ影が三つ。

「……魔理沙。あなたの変身、やっぱり版権的にまずいわよ」

「いや変身後の咲夜のほうがまずいだろ」

「二人ともまずいっ！」

「妖夢、お前はダサすぎるぜ」

「ふふっ、ごめんなさい、ついおかしくって」

「わ、笑うなっ！」

12 二人の帰還（後書き）

ストックなしでの毎日更新はきついなあ。せっせとストックしなきゃ。

次回は「戦闘の天才」！

13 戦闘の天才（食事シーン加筆）

咲夜の話によれば、パチュリーは図書館にいる可能性が最も高いという。咲夜もフランから逃げつつレミリアを連れ出すので精一杯だったので確証はないが、パチュリーがここ数日自室に戻っていないのは確かだったのだ。だから図書館の奥にこもりっ放しのまま倒れているのではないかと咲夜は話した。

ついでに小悪魔がうるつについていたら殺しておいてくれとも言われた。

妖精と違ってそう簡単に復活できないような気がするが……と霊夢は思ったが、深くは考えないようにした。

図書館に着くまで、幸いにも敵と遭遇せずに済んだ。中に入って調べてみると案の定、奥のほうでパチュリーが倒れている。

しかし図書館から連れ出そうとしたとき、奴は現れた。

フランドール・スカーレット。

図書館を出てすぐの廊下で鉢合わせてしまったのだ。

「結界呪縛！」

霊夢は即座に御札を投げ、パチュリーを物陰に寝かせた。

結界呪縛も芳しい効果はなかった。ほんの一瞬動きを止めるものの、フランは難なく呪縛を振りほどく。

フランが殴りかかろうとすると、霊夢は瞬時にその力の強大さを察した。

まともに食らったら一撃だわ。

霊夢は相手の攻撃時とはにかく避けることに専念した。相手の動きを読み、確実に避けてゆく。戦闘時の機動力にずば抜けたものがあるわけではない。しかし、霊夢の精密な回避能力はスピードを凌

罵する。

フ란の攻撃に対し、靈夢は大量の御札を使って回避する。フ란が殴りかかってくれば、投げ付けた御札でその手を縛り、攻撃自体をそらしてしまう。あるいは、攻撃のタイミングをワテンボ遅らせ、それを利用して回避する。

フ란の攻撃の誤差分を考慮し、御札はショットガンのように大量に投げつける。だが萃香の力が強まっている以上、投げ付けた全てを発動させることは危険であるため、そのうち使用するのは多くて数枚だ。結果としてほとんどが使わずにただ床にばら撒かれるだけの御札となってしまうが仕方ないことである。回避をするたびに十枚近くの御札が床に散らばった。

しかし、靈夢はその無駄遣いを気にしたりはしなかった。堅実に、ただ堅実にリスクを回避していく。それが第一優先なのだ。

御札を使って避け切れそうにないときは、左手で攻撃を弾いた。萃香の手である。鬼の手だけあって、靈夢の元々の手とは比べ物にならない強度だった。ぐっと力を入れれば一回りも二回りも大きくなり、衝撃は伝わるもののフ란の攻撃を十分に受けられる。ただやはり手の部分だけなので、それに頼りきることはできず、回避の一手段としてしか使わなかった。

フ란の破壊的な攻撃を十数回は避けたところになると、流石に靈夢の御札も残り少なくなっていた。床に散らばったものは百枚くらいあるはずだが、拾っている余裕なんか微塵もない。

リスクは確実に回避してきているが、靈夢に残された猶予は少なかった。

フ란も攻撃が当たらないので興奮し、半ば発狂したように拳を振るう。

靈夢はフ란に知られないように左手に力を込めていた。どの程度まで能力を使えるか試していたのだ。そして、萃香の命が安全でいられる水準を感覚的に探り、その最大の値で保った。

準備は全て整った。靈夢はタイミングを計っていた。

フランは動きが鈍くなった霊夢に対し、右の拳で渾身の一撃を入れようとし、左足を踏み込んだ。

霊夢が待っていたのはこの瞬間だった。

瞬時にフランの左足を結界呪縛で固定した。フランは床に満遍なく散らばった御札を何枚も踏みつけていたので難しいことではなかった。

もちろんこれだけでは効果は見えてこない。もとより踏み込んだ足なんかを固定されてもフランは気が付かない。殴り終わるまで動かすものでもないし、攻撃を邪魔された訳ではないのだ。

霊夢が奪ったのは選択肢だった。フランは霊夢の顔に渾身の一撃を叩き込む。これ一択になったのだ。

相手の攻撃を読めれば、確実に回避することができる。しかし、霊夢はそうしなかった。霊夢が回避できる可能性は完全に絶たれた。あるうことかフランが踏み込んだ直後に霊夢も踏み込んでいたのだ。

クロスカウンター。

霊夢が狙っていたのはこれだった。萃香の左手の強度とフランのパワー。この戦闘で突出していた二つの要素を最大限、有利に活かすにはクロスカウンターしかないのだ。

全力で右の拳を出したフランが、ほぼ同時に繰り出された霊夢の左ストレートを見た時にはもう遅い。体重の乗った前足は固定され、体は違う選択肢を選べない。

霊夢の左ストレートはコンパクトに繰り出されたが全体重が乗っていて、さらにその拳には凝縮された鬼の力があつた。

次の瞬間、霊夢とフランの全パワーが、鬼の手の強度をもってフランの顎に叩きつけられた。力が顎に集約されているため、衝撃は体に逃げない。振り抜かれる拳と共にフランの顎先が体とちぐはぐな方向を指し、首はひどくねじれてゆく。

遅れて霊夢の顔にフランの力の抜けた手がぺちりと当たった。一

瞬にして意識を失ったフランは前のめりに倒れた。

「これで顎が砕けないなんて恐ろしい子ね」

全て仕組んだ通りに進んだので霊夢は落ち着いていた。

渾身の一撃によって萃香の力が弱まったのを確かめると、即座にフランと距離をとり、相当量の霊力を放出した。

「百倍呪縛！」

霊夢は床に散らばった全ての御札を発動させ、フランを縛った。

これもやはり予定通りだった。

「良い子はお昼寝の時間よ」

紅魔館の古びた柱時計が三時を知らせた。

思えば最初から最後まで霊夢の思惑通りだった。霊夢はそこに物足りなさを感じつつも、概ね満足していた。

タイトアグレッシブ。

霊夢の戦い方を表現するならば、これしかない。

タイト、つまり基本は堅実であるが、攻撃にでるとなるとアグレッシブなのだ。回避において霊夢はスピードに長けている訳ではない。それよりも精密性を重視し、堅実にリスクを負わないようにしている。

そしてパワーがある訳でもないが、攻撃に出るとなると大胆だ。きっちり攻めきる。相手の様子を見ながら決めるのではなく、ここだ、と決めたらそこで全力を出す。

この二点はスペルカードルールにおいては「低速回避」と「決めボム」に集約される。

タイトアグレッシブというのはポーカーなどのリスクを読む勝負事において使われる戦略の一つだ。

これは決して短時間で勝利を収めるような戦略ではない。勝負が

長引く傾向すらある。がしかし、長期的に見れば最も合理的な戦術なのだ。不確定なリスクは負わず、リスクを最小にとどめ、攻撃に出たら確実にものにする。着実に、だが必ず、勝利へと近づいてゆくのだ。それ故、タイトアグレッシブは強い。

もし仮に、この世に「勝利の方程式」というものがあるならば、それはタイトアグレッシブに他ならないだろう。それほどに合理的な戦術なのだ。

しかしながら、霊夢はそんなことを知らずに戦っている。タイトアグレッシブという戦術をもたらしたのは単に性格だ。「避けるときはきつちり避けたい。攻めるときは思いつきり攻めたい」と考えているだけなのだ。

これが魔理沙だと「ササツと避けてすぐ攻めたい。攻めるときは攻めまくりたい」と考えていて、それを戦術としてしまうと、素早く避けたことで自滅し、オーバーキルで力をロスするといったようになりがちで、大変非効率となってしまう。

そのことから霊夢の無自覚に取っている戦術がいかに優れているかがわかる。単に楽をしようとしているだけだが、そのうえ戦術もいつだって合理的である。

それらの要素が霊夢にもたらすのは絶対勝利であり、彼女の戦闘を見たものは口々にこう称す。

戦闘の天才。

そう、霊夢が幻想郷で一番強いのは最強のパワーだからではない。最速のスピードだからではない。最上の能力だからではない。

戦闘の天才だからなのだ！

御札をほとんど使ってフランを呪縛した霊夢には余裕があった。
「すぐに目が覚めるだろうから結界呪縛は必要だけど、百倍はやりすぎたわね」

しかも百倍という数は大雑把なもので、懐の御札の残りから推し量ると百二十枚くらいで呪縛している。昏倒している相手にそれは流石にやりすぎである。

とりあえずパチュリーを抱え、台所へ向かった。霊夢は朝から何も食べていなかったのである。

大きな冷蔵庫を開けると、昨晚咲夜が作っておいたのだろう、ミルフィーユが六皿も用意してあった。

一皿手にとってその匂いをかいでみると、上質な甘味が脳を直接刺激するようだった。一口食べると、過剰な甘味などはなく、そこにあつたのはむしろコクと称される類の甘味であり、味わう者の探求を許しつつも飽きさせない深さがあつた。

舌鼓を打ちながら、つつい五皿も平らげた。考えがあつて一枚だけはちゃんととっておいた。

霊夢はそれでもまだ足りなかったので、次は何の肉かわからない肉を適当に焼いて食べることにした。霜降りの立派な肉で、おそらく人肉ではないはずだ。吸血鬼の館なので人肉であるリスクは当然ある。しかしここは決めボム。アグレッシブに、食べると決めたら何でも食べるのだ。

勝手にフライパンを出し、少量の油を敷き火に掛ける。フライパンが温まる間に調味料を探す。ちょうどいいことにニンニクがたくさんあつた。ここの家の吸血鬼はニンニクもいけるらしい。その証拠にどれも青森県産である。幻想郷では手に入りづらいだろうし、これはかなりのこだわりだ。

サツと皮を向きニンニクをスライスする。みずみずしくて、香りもまるやかであり質の高さが窺える。ちなみに包丁も悪くない。

さすがナイフ使いの咲夜。

温まったフライパンにニンニクを投入し、きつね色になったら取り出す。紅魔館の一角は食欲をそそるニンニクの香りが立ち込めた。そして厚切りの肉を焼き始める。すぐに表面から滲み出るようにして肉汁が姿を現す。厚みがあるので火は強くしすぎないようにして調節する。

焼きあがったら火を止め、置いてあった岩塩をふりかけ、ペッパーミルで粗引きコショウをまぶす。

霊夢はもう我慢できなくなったので盛り付けをせず、包丁で一口サイズに切り分け、フライパンのまま食べ始めた。

口に入れた瞬間に知るのは無造作に入れた先ほどの岩塩のやさしい塩気だ。母性すら感じる。やがて広がるコショウの明晰な香りは無知な口内を啓蒙していく。

一口かめばその柔らかさが極上だ。味は牛肉、それも間違いなく和牛だ。濃厚なミルクにも似た風味を持つ和牛特有の脂が口の中いっぱいに広がるのだ。噛むほどにじゅわっと湧き出て、それは肉の柔らかさと相まって、肉なのに喉越しすら感じさせる。

「ああ、生きてて良かった」

霊夢はそんなことを言うつもりはなかった。しかし心の底から出たその声は、霊夢の判断より先に出たのだ。まぎれもない本心だった。

気付けば肉はもうなくなっていた。食べた記憶なんかない。それが和牛の実力だ。

その後さらに食器棚の一番上にあった、おそらく高いであろう紅茶をじっくりと堪能した。

この芳醇な香り。いうならば歴史！ いや、積み重なる味の地層！ 霊夢は一人でそんなことをやって消耗した体力を回復させていった。

冷凍をあさるとハーゲンダッツがあり、迷った挙句、誰もいないにも関わらず「萃香のためよ、うん、萃香のため」と言い訳じみた

つぶやきを繰り返しながら食べ始めた。

そうやって三十分はくつろぎ台所を出ると、おもむろに一枚のスペルカードを出した。

「夢想封印！」

霊撃によって台所は大破し、霊夢のやったことの痕跡は消え去った。それなりの霊力を消費したがやむを得ない。

ちなみに霊夢のこういうところが影で「鬼巫女」と呼ばれる所以なのである。

パチュリーを背負い、そろりそろりとフランの様子を窺った。

「意外と効いてたみたいね」

あの一撃で顎も砕けず無傷だったのであまり効いていないかと霊夢は思ったが、そうではなかったようである。フランはまだ気を失ったままであった。

霊夢は持ち出した最後の一皿のミルフィーユを少し取ってフランの口にこすりつけ、残りを綺麗に食べた。そして皿を叩き落し、破片のいくつかをフランの服の中に入れた。

「萃香のため萃香のため」

自分でもちよつとやりすぎたと思ったが、霊夢は無意味な言い訳をし続けた。

しかし意識を失い、凶悪な表情でなく、力の抜けた年相応の少女になっているフランの可愛い顔を見ると、さすがにフランがかわいそうになってきた。

霊夢はフランを抱え、パチュリーと共に救出することにした。

凶暴化したとはいえ、スキマ空間で寝ていれば元に戻るだろうし、仮に暴れたとしても今頃元気な妖怪がわんさかいるはずだから大丈夫。そう考えた。

紅魔館を出ていく霊夢は、穏やかに眠るフランの頭をなでながら、母親のような優しい笑みを纏っていた。

が、口に付いたミルフィーユは拭いてやらなかった。

霊夢はやはり、鬼巫女であつた。

13 戦闘の天才（食事シーン加筆）（後書き）

戦闘の天才・霊夢をかつこよく書きつつも、
鬼巫女霊夢のクズっぷりも存分に書きました。

初稿になかった食事シーン追加しました。
完全に蛇足ですが推敲の勢いで書きちゃったので。

今回は十分の一の集中力で十倍の生産量を目指して書きました。
ちよつと雑でスカスカぎみかもしれませんが。
でも適当にやって数時間でこんだけ書けたのでまあまあ満足。
誤字脱字はかつてない量でしたが。

毎日更新はここまで。次回からは不定期更新になります。
もしかしたら別作品に主軸を移すかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7327m/>

東方スキマ合体！

2010年10月8日13時40分発行